

群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

Center News

Center for Cooperative Research and Development on School Education
Faculty of Education, Gunma University

第5号

(2017年3月31日発行)



「学び合う仲間による教員研修リレー講座」における現職教員の真剣なまなざし

目次

- 2 ● 巻頭言：地域と教育学部を結ぶ役割を担って
- 3 ● 寄稿：「学び合う仲間による教員研修リレー講座」に寄せて
- 4 ● 寄稿：群馬大学教育実践研究の更なる充実に向けて
- 5 ● 寄稿：個別学習相談授業をスタートさせて
- 6 ● 報告：群馬大学学校経営サロン
- 7 ● 報告：附属幼稚園・附属小学校から
- 8 ● 報告：附属中学校・附属特別支援学校から
- 9 ● 報告：教員養成FDセンターの原点にもどって
- 10 ● 報告：子ども総合サポートセンター事業概要
- 11 ● 報告：附属小学校における取組～提案授業・授業研究会～
- 12 ● 報告：現職教員の成長を促す温かな学び合いの場
- 13 ● 報告：教育臨床心理部門の取組
- 14 ● 報告：群馬大学教育実践研究34号発行のお知らせ
- 15 ● 報告：センター協議会・全国教育実習研究部門会議・資料室利用状況
- 16 ● 報告：次年度へ向けた新しい取組の紹介

● 巻頭言

地域と教育学部を結ぶ役割を担って

附属学校教育臨床総合センター長 上 原 景 子

カレンダーを一枚めくって3月になると、「三寒四温」という言葉のとおり、寒い日がありながらも日差しが前よりも明るく暖かく感じられるようになりました。大学では後期の授業も試験も終わり教室も廊下もとても静かですが、時々学生たちが集まって先輩の卒業を祝う準備をしている様子が見受けられます。そんな中、教育実習から帰ってきて元気に明日の授業の準備をしている学生で、夜遅くまで賑わっていた9月から11月までの教室や廊下を時々思い出します。「今日はどうだった?」「頑張っている?」などと言葉をかけると、どの実習生もその日に学んだことや感動したことなどをすぐに話してくれました。こうして昨年度の3年次に基礎実習Aで5週間、応用実習Bで3週間、計8週間の実習を体験させていただいた学生たちがもうすぐ卒業し、その大半が教師としての一步を踏み出します。

群馬県教育委員会との連携に関わる協議会で群馬大学教育学部が「地域とともに行う教員養成」という視点を取り入れ、「学校現場往還型カリキュラム」を開始してから、すでに10年以上が経ちました。このカリキュラムでは、群馬県内の非常に多くの教育委員会と学校のご理解とご協力の下で、1年次の教育現場体験学習、2年次の授業実践基礎学習、3年次の本実習、4年次の教職実践インターンシップを体系的に実施しています。学生たちは、「学校現場往還型」という名前のとおり、これまでの「生徒」という視点でなく、「教師」という視点で、学校現場を体験的に学んでは、大学での学修を進めることを段階的に繰り返し、教師としての素地を築いていきます。このカリキュラムは、全国でも稀に見る先進的な教員養成プログラムとして高い評価を受けていますが、それは、県市町村教育委員会ならびに実習に協力してくださる数多くの学校のご理解とご協力の賜物です。

私たち附属学校教育臨床総合センターは、「教育実践に関する臨床の学の創出」とその成果を踏まえた教育、研修、支援を行うことを主な使命としています。私たちは、大学と学校現場との協働的・実践的な研究を通して、今日の学校教育課題（いじめ、不登校、教師のストレスなど）の解決に資する実践的指針を見出すことを目標に、教員養成と地域の教育や学校現場への貢献を行っています。私たちの組織は、「教育実習・実践開発部門」「国際理解教育部門」「教育臨床心理部門」の3つの部門と「子ども総合サポートセンター」「教員養成FDセンター」「学部・附属学校共同研究センター」の3つのセンターから成り立っていますが、今後もセンター職員一丸となって、地域と群馬大学教育学部を結ぶ役割を一層効果的に担っていきますので、ご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

● 寄稿

対話と学び合いと操作的でない教育観— 「学び合う仲間による教員研修リレー講座」に寄せて

愛知教育大学 野 平 慎 二

古代ギリシャの哲学者ソクラテスは、教職の教科書などではしばしば「人類の教師」と紹介されるが、本人は「知識を教え伝える者」という意味での教師ではないことを誇りに思っていた。よく知られているように、当時の他の知識人と異なり、ソクラテスは若者に対して真理を教え伝えるのではなく、問いかけを通して相手が自分の頭で考え、自分なりに答えを産み出すのを助けるという方法をとった。ソクラテスにとって、自分の頭で考えることのない生、他人から正解を与えられる生は、生きるに値しなかった（ソクラテスが最重要と考えた問いは、「善く生きるとはどういうことか」という問いだった）。ソクラテスは自分自身を「アブ」に喩えている。すなわち、太りすぎて動きの鈍い馬のようになってしまったアテネ、善く生きるとはどういうことかを知ったつもりになり自己満足の眠りに陥っているアテネにまとわりつき、針で刺し、いらつかせ、目覚めさせるアブの役割を、ソクラテスは自認していた。人々は、ソクラテスからの執拗な問いかけの前に、生きる上で大切なことを自分が何ひとつ知らないことに気づかされ、ともかくも自分の頭で考えることを促されたと伝えられる。

もともと、思い込みや偏見にとらわれている市井の人々が自分なりに産み出した考えが正しい考え（真理）であるという保障はない。現にソクラテスは、愛してやまなかったまさにアテネの人々によって、偽りの神を若者の間に広めたとして裁判にかけられ、死刑判決を受けてしまう。この出来事を前に、ソクラテスの弟子のプラトンは市井の人々に絶望し、真理を把握できるのは哲学者だけだ、そして哲学者が政治をも担うべきだ（臆見にとらわれた人々がいくら議論してもよりよい政治社会は実現しない）、という実に高慢な説を展開するに至る。

古代ギリシャ以来、デモクラシーを担うべきは先見の明のある少数のエリートか、それとも多様な観点と意見をもつ大多数の一般人かをめぐって、さまざまな政治哲学的な議論が交わされてきた（この問題は学級における子どもたちの自治のあり方にも通じるだろう）。ただ、いわゆる哲学者もまた、これまで真理とみなされてきたものを再吟味したり他人と議論したりするなかで新しい真理に到達するのであり、まったくの独力で無から真理を産み出すなどということはない。真理が産み出されるためには、ソクラテスが示しているように、異質な考えをもつ者の間での問答ないしは対話という契機が不可欠だと考えられるのである。

「学び合う仲間」をキャッチフレーズに掲げた講座で話をさせてもらう以上、多少なりともソクラテスにならい、できる限り問いと対話を喚起するような仕方に参加者のなかに入り込みたい、という当初の願いは、当方の実力不足ゆえにあえなく潰えた。受講された皆さんには本当に申し訳なく、慚愧の念に堪えない。ただ、（だからといって免責されるわけではないのだが）自らの言動が相手との間でどのような意味をもつのかをこちら側で決めることはできず、思いがけない仕方を受け止められている可能性もないわけではない。相手は操作不可能であるという点こそ、人間がモノではなく人間であることの証左である。思想史の観点を踏まえることで、現代の過度とも思える対象操作的な教育観を受講生の皆さんがそれぞれの仕方で見つめ直す一助となっていたならば幸いである。出会いと学び合いを通して思いがけず新しい自分に気づき、自分をさらに磨いていけるような、そんな奇跡のようなリレー講座が今後も続いていくことを願うものである。

● 寄 稿

群馬大学教育実践研究の更なる充実に向けて

技術教育講座 田 辺 秀 明

学校教育臨床総合センターのセンター紀要「教育実践研究」No.34が刊行されることになりました。このニュースと前後して皆様のお手元に届くものと思われます。多数の優れた論文が寄せられ掲載されていますので是非お読みいただければと思います。附属学校園を含む幼稚園から高等学校の現場の教諭、大学教職員及び学部学生・大学院生による教育実践研究結果が掲載されています。

基礎研究では、一般性・体系化・理論に重点が置かれる一方臨床現場ではどちらかというと具体性・効率・ノウハウ・経験・勘が重要になります。基礎研究の論文では単純化の為のモデル化が行われ、前述の目的を担保するため一意性が重視されますが、臨床現場では殆ど重視されません。臨床現場で生じる現象は複雑で基礎研究では単純化の為に省略された要因が無視できない場合も多く、そのこともあり経験・ノウハウをベースとした現場のプラクティスが確立され重用されます。しかし、一般性等を重視する基礎サイドでは現場のプラクティスは往々にして見落とされがちです。

本紀要では多くの教育臨床現場からの教育実践事例とプラクティスが報告されています。なるべく多くの方々にお読みいただき活用していただけるよう又執筆者の意図する所が読者に誤りなく伝わるよう、平易な表現と一意性のバランスに留意して編集を行いました。

センター紀要「教育実践研究」No.34が一人でも多くの方々のお役に立てれば幸いです。

● 寄 稿

個別学習相談授業をスタートさせて

教職リーダー講座 深 谷 達 史

「うまい勉強のやり方が分からない…」、「がんばっているのになかなか成果があがらない…」このように、勉強について悩みを持つ児童生徒は少なくありません。教育心理学では、学習に悩みを持つ人を対象に、心理学の知見に基づき複数回の個別的な面接を実施することで、学習者としての自立を促す「認知カウンセリング」という活動が行われています。

学校教育臨床総合センターのサポートのもと、2016年度にスタートしたこの事業では、教師を目指す群馬大学教育学部の学生が相談者となって、応募した大学近隣の小中学生に認知カウンセリングを行います。支援の質を高めるため、以下のような3回の研修を実施し、参加した児童生徒の悩みが少しでも解消されるよう学生は研鑽を重ねます。

事前研修…認知カウンセリングの考え方や具体的な支援方法を学ぶ。

中間研修…初期の相談の様子を互いに報告しあい方針を検討する。

事後研修…一連の相談の過程と成果を発表し改善点を議論しあう。

認知カウンセリングでは、個別に相談を行うメリットを生かし、悩みの原因を丁寧に診断し、支援を図っていきます。そこでは、単に問題の答えを出すだけでなく、自分で考え方を理解し、うまく学習を進めていくための力を養うよう働きかけます。例えば、問題を解きつばなしにするのではなく、なぜ間違えたかをポイントとして残しておくなど、効果的な学び方を身に付けることを促します。

こうした取り組みを通じて、参加した児童生徒の学ぶ力を高めることはもちろんのこと、教師を目指す学生が「子どもがどういったつまづきを示しうるのか」、「それをどう解消しうるか」を学び、教師としての資質能力を高めることを企図しています。

現在は、群馬大学荒牧キャンパス周辺の小中学校のみを対象に募集を行っておりますが、前橋市内に在住で、保護者による送迎が可能であれば、相談を行うことが可能です。また、認知カウンセリングの考え方は、地域ボランティアなどによる学習支援にも適用可能です。ご関心がある

保護者、学校の先生はどうぞ学校教育臨床総合センターのホームページからお問い合わせください。また、認知カウンセリングに興味のある方は、インターネットから認知カウンセリングの書籍をご覧いただくことができます。以下をご参照ください。



市川伸一(編) (1993). 学習を支える認知カウンセラー—心理学と教育の新たな接点— ブレーン出版

(http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/book_cog-coun.htm)

市川伸一(編) (1998). 認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導 ブレーン出版

(http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/book_cog-coun2.html)

● 報 告

群馬大学学校経営サロン

教職リーダー講座 高 橋 望

2015年度より、学校経営サロンが始まりました。学校経営サロンとは、現職の先生方と大学教員が、学校経営について自由に語る場のことです。「サロン」と命名した理由は、「研究会」のように堅苦しくない雰囲気の中で、日頃感じていること、考えていることなどを、ざっくばらんに語る場を設けたいという思いがあったからです。日々の教育実践、あるいは実践をしていく中で感じている疑問など、他校の先生方や大学教員と語り合うことで、日々の実践に対するヒントが得られるのではないかと考えています。

サロンは主に、毎月第4水曜日の19:00～20:30、群馬大学荒牧キャンパスの教育学部附属教育臨床センター内(B102教室)で開催しています。ご参加いただいた先生方からの希望を踏まえ、今年度設定された主なテーマは、以下の通りです。

「授業づくりのポイント」 「学校行事と学校経営」 「エンカウンターグループ」
「アクティブ・ラーニングと学び合い」 「学級経営と学級づくり」

平日の夜にもかかわらず、前橋市内だけでなく、高崎、藤岡、桐生、伊勢崎、吾妻・利根など、県内各地から、そして、50代から初任者まで、幅広い年齢やキャリアの方々にご参加いただきました。「学校経営というとなんかイメージがあったが、参加したらそんなことは全くなかった」とおっしゃる先生方も多くいらっしゃいました。若手の先生の授業ビデオをもとに参加者全員で検討した際には、多くの意見が出され、非常に充実した時間となりました。また、今年度は上越教育大学からの参加者もありました。

ある参加者の言葉です。「初めはなかなか難しい内容だと思っていたのですが、各学校でのちょっとした話をうかがっていると、世界が広がるなと感じました。また明日から職場で頑張ろう、と思えるようになりました。

先生方が少しでも元気になれるよう、サロンをご活用いただければ幸いです。

学校経営サロンでの出会い

藤岡市立藤岡第二小学校 熊 王 峻 祐

はじめは、以前一緒に勤務している先生からお誘いを受けたことがきっかけでした。学校経営サロンでは、様々な地域や年齢、異なる立場の方々と一緒に一つのテーマについて話し合い、それに対する色々な見方に触れることができます。普段の学校での勤務で感じている、授業づくりや学級づくり、生徒指導、校務分掌や職員内の関わりなどの悩みや疑問も色々な見方や考えから見ていくと、新たな発見があり、面白さを感じました。

私が初めて学校経営サロンに参加した時は採用一年目で、学校現場について分からないことだらけでした。しかし、そんな自分も意見が言えるような温かい雰囲気の中で、楽しくお話することができました。そんな中、様々な立場の方の意見を聞く度に、初任者もまた学校をつくる「担い手」であり、自分の考えも学校をより良くしていくアイデアが隠れているのだな、と感じました。「子どもたちがよりよく学び、成長していく」ように育てていくことは、必ずしも一つとは限りません。時には、この話し合いの中で自分が考えもしなかった意見や、知らない考えに触れることがあります。

人を育てていくことは大変であり、複雑であるなあ、と感じると同時に、奥深さを秘めているなあ、と参加する毎に思います。教育の醍醐味や楽しさを直に感じられるので、今後も参加していきたいと思っています。



● 報 告

附属幼稚園から

附属幼稚園 西 村 竜 哉

今年度は、「自己肯定感をはぐくむ保育 ～他者への思い・他者からの思いに着目して～」を研究主題に、幼児一人一人の自己肯定感をはぐくむために、他者への思いをもったり、他者から思われたりするような状況の生成に関する教師の役割について追究してきました。すなわち、本研究では、「他者に興味をもったり、憧れ・真似をしたい思いをもったりすることや、そう思われたことで自己肯定感がはぐくまれる」ことを前提にして、他者に興味をもっている姿や真似をしている姿など、他者とかかわっている場面を事例として記述しました。その事例を基に保育カンファレンスを行い、様々な「幼児の自己肯定感をはぐくむことにつながった幼児の体験」を見出しました。そして、幼児が「めざす姿」に向かっていく過程に必要な、教師の援助や環境の構成・再構成などの教師の役割について考察を行い、自己肯定感をはぐくむためには、幼児が「安心」して自己発揮できる状況を生成することを見出しました。しかし、一言で「安心」と言っても、その状況に合った安心を生成するための様々な保育技術が必要になり、今回の研究では、それを保育する際のリソースとして蓄積してきました。

また、指導計画の見直しも行いました。各期が終了する毎に当該学年が修正案を提案し、職員全体で検討しました。さらに、教育課程に記述されていない「潜在的カリキュラム」について協議し、職員間で共通理解を図ったり、各職員が自身の不足に気付いたりするような機会を設けました。

6月・10月には、県内外から281名の参加者を迎え、公開研究会を実施しました。来年度の公開研究会（6月）には、上述の研究成果を発表しますので、ご参加くださいますようお願いいたします。

附属小学校から

附属小学校 吉 田 恵 一

附属小学校では、本年度より新しい教育研究を立ち上げました。新研究では、「未来を拓く子どもの育成」を研究主題に掲げ、副主題を「子どもが問い続ける問題解決的な学習の追求」と設定しました。

2020年より本格実施が始まる新学習指導要領において、子どもたちに「資質・能力」を育成することが目標として示されました。そこで、本研究では、これからの時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を捉えるとともに、それらの資質・能力を備えた「未来を拓く子ども」を育成することを目標としました。1年次となる本年度は、子どもたちが問題解決における自分の答えを繰り返し問い直すこと、すなわち「問い続ける」ことが、資質・能力の育成に必要であるという仮説を基に、「子どもが問い続ける問題解決的な学習」となるように、本校でこれまで取り組んできた問題解決的な学習を見直してきました。各教科等においては、子どもたちが問題解決における自分の答えを繰り返し問い直すことができるように、問題解決的な学習の過程を構想し、授業における具体的な学習指導の工夫を行って参りました。

学部先生方のご協力や、県教育委員会指導主事の先生方からのご指導をいただきながら、計12回の提案授業と各教科等部による部内授業を通して、研究の検証と修正を繰り返してきました。

研究の成果については、6月9日・10日に開催予定の公開研究会で発表いたします。今後も、本校の研究や教育活動の成果を地域に広め、参考にしていただけるように、より実践的な研究や取組を進めていきたいと考えています。



家庭科の提案授業の様子

● 報 告

附属中学校から

附属中学校 高 橋 典 平

本校では、今年度は研究の1年次として、研究主題を「強くしなやかに創造する力の育成」、副題を「問題解決を促す協働・創造学習と設定し、学校教育目標「共生」「創造」「健康」の具現化を目指して教科研究、道德、学活、学校保健のそれぞれについて研鑽を積んでおります。

本校生徒が、これからの社会を生き抜いていくためには、既存の考え方を超える「新しい価値を生み出す力」すなわち「創造する力」を育成していく必要があると考え、本研究主題を設定しました。また、本校で育成したい「創造する力」として、① 学習への意欲・知的好奇心、② 多視点的に物事をみる力、③ 論理的思考力・表現力の3点に注目し、その力を育成するために、副題「問題解決を促す協働・創造学習」を掲げ、主体的・対話的で深い学びの視点での各教科の授業改善に取り組んできました。

道德では「自己の生き方を見つめ直し、よりよく生きようとする生徒の育成を主題に掲げ、道德的価値を自らの生活とつなげて考えられる生徒の育成を目指しました。

学活では「ちがいを理解し、ちがいを生かし、ともに成長することができる集団づくり」を主題に掲げ、学級活動における話し合いの場面設定の工夫や、継続的な振り返りについての実践を行いました。学校保健は、「睡眠の大切さを理解し、よりよい生活スタイルを確立できる生徒の育成」を主題とし、本校独自のすこやかタイムの取り組みを中心に、学級活動や保健体育と連携しながら実践を進めてきました。

また、今年度は9月8日・9日に公開研究会を行いました。昨年度は校舎改修のため公開研究会の実施を見送りました。そのため、1年ぶりの公開研究会でしたが、多くの参加者に恵まれました。公開研究会に参加してくださった皆様のご意見を基に、研究2年次としてさらに研究を推進していきたいと思っております。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校 内 田 誠

本校は、平成28年度から研究主題を「人とかがわりながら学びを深める児童生徒の育成」とし、交流及び共同学習を研究の中軸に据えています。

11月に開催した公開研究会では、小学部は校舎を共有する附属小学校との国語科における壁新聞づくりの授業実践を、中学部は近隣の公立中学校特別支援学級との作業学習における花植えや花壇作りの授業実践を、高等部は校内に開いたカフェに地域のお客様を迎えた喫茶サービスの授業実践を公開しました。小・中学部においては、両校の子どもたちがかがわりを深めながら、それぞれの学習のねらいに迫る姿を見ることができました。教師にとっては、両校の教師で、両校の学習のねらいを共有しながら子どもを指導、支援、評価し、次時の改善を図ることができるようになってきました。また、両校の教師が持つ専門性や強みを生かすことの大切さにも気付くことができました。高等部においては、お客様に生徒一人一人の学習のねらいを具体的に伝えたことで、学習のねらいに対する評価や感想を直接いただくことができ、子ども自身が、お客様からの評価や感想を基に、自身の取組の成果や過程を振り返り、目標ややり方を捉え直すことができるようになってきました。3つの授業実践をとおして、両校の学習のねらいから「共通のねらい」を設定し、両校の教師で教材や活動を考えていくことが大切であることが分かってきました。そうすることで、教師にとっても学びが促され、教師の意識や資質、能力の向上にも資することが分かってきました。

交流及び共同学習は、群馬県においても多くの実践があります。次期学習指導要領の改訂に向けた動きの中では、インクルーシブ教育システム構築に向け、交流及び共同学習を推進することの重要性を読み取ることができました。しかし、本校に限らず、交流の側面と教科等のねらいを達成することを目的とする共同学習の側面を一体に捉えた実践は十分ではないと考えられます。様々な学部・学年や教科においても、本来の目的に沿った交流及び共同学習が実現できるよう、今後も実践と考察を重ねていきたいと考えています。

● 報 告

教員養成FDセンターの原点にもどって

教員養成FDセンター長 黒羽 正 見

平成18年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方懇」の中では、「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の間に共有されていない、教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い、学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していないなどの問題が指摘されました。また、国立大学法人の第1期中期目標期間終了を踏まえ、平成21年6月5日の文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では、「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されています。このような背景を受け、本学教育学部では当時の運営委員会が、教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適したFDプログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し、2011年4月から「教員養成FDセンター(以下、「FDセンター」と呼ぶ)がスタートしました。FDセンターでは新任の学部教員研修をその取り組みの中心とし、新任教員ガイダンス、体系的教育実習カリキュラム実践の説明会、附属学校園のフィールドワーク、附属学校回りの公開授業研究会への参加、教育実習への参加、教育カンファレンスなどを行ってきました。附属学校園のフィールドワーク、附属学校園の公開授業研究会、教育実習などへの参加した後、自分の持ち寄った感想シートに基づき、事例検討会のカンファレンスをFDセンター運営委員とともにすすめました。さらに魅力ある授業づくりへ企画・運営・支援として、教育サロン(教育談話会)、県外先進校視察研修、普段の授業公開などを行い、附属学校教員と学部教員とが同じテーブルを囲みながら、異なる分野、文理の壁を越えた温かくも、厳しい議論が展開されてきました。教員養成とのかかわりを考えて各教員がどのように自分の専門の授業を展開していくか、自身の深い専門性を学校現場が抱える課題解決にいかに応用していくかを考えるうえで、特に教員養成学部の経験のない新任教員にとって有益な場を提供できたと感じております。

その後も大学教育改革、特に教員養成学部についての提言が次々と出されております。例えば、平成25年5月の教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」では、「初等中等教育を担う教員の質の向上のため、教員養成大学・学部については、量的整備から質的充実への転換を図る観点から、各大学の実態を踏まえつつ、学校現場での指導経験のある大学教員の採用増、実践型のカリキュラムへの転換、組織編成の抜本的な見直し・強化を強力に推進する。学生の学校現場でのボランティア活動を推進するなど、大学と学校現場との連携を強化する。また、文部科学省は今後行われる小学校教員免許の改訂や大学院の教職大学院化に伴い、附属学校園との連携による積極的な研修を通じた教育実践的な教員を強く求めている」と提言されました。



教育サロン

そこで、今年度のFDセンターでは、学生の実践的指導力の育成・強化を一層図ることが本学部の発展には不可欠であるとの共通認識に基づき、文部科学省の各提言等を踏まえ、今までのFDセンターの取組の洗い出しを行い、活動内容の見直し案を検討してきました。

新任教員に限らず、教育学部の全教員が、学生に対して授業・研究指導等を行うにあたっては、学校現場(幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校)で適切に教育活動を行える教員等を養成するという認識を深める必要があること。そして、そのためには教員自らが、学校現場の実態と課題を理解した上で、学生指導に当たる意識を醸成することを目的として、学校現場における研修を主体とし、次年度からは次の二つのねらいを着実に達成していこうと考えています。

1. 附属学校園等の活動により積極的に参加し、学校現場の現状への理解を深める。
2. 本学部における教員養成への理解を深めるとともに、教育養成に関わっているという意識を高める。

なお、活動内容の詳細については、FDセンター報告の中で説明します。

(写真は今年度の教育サロンにおいて、新任学部教員、学部教員、附属学校園教員が「共に学び合って高め合っている学習空間を醸し出している様子です。)

● 報 告

子ども総合サポートセンター事業概要

子ども総合サポートセンター長 懸 川 武 史

1 研究「学びのユニバーサルデザイン（UDL）に基づく授業研究の在り方」

CAST（Center for Applied Special Technology）によるUDLの理念「子ども一人一人の学びを保障する」に基づき、授業実践を通し研究を推進する。今年度UDLのガイドライン（荒巻訳2015）をフレームワークとし、「UDLガイドラインーぐんまモデル」を修正した。また、モデルを元に授業デザインを行い、第1学年図画工作科の授業を特別支援学校と合同で2月に公開した。

※ 公開研究会では、県内外より52名が参加した。

2 「電話相談」、「来所相談」 ※平成28年度支援ケース数：電話13名 来所15名

県内の障害のある幼児とその保護者、学級で不適応を起こしている幼児児童生徒とその保護者を対象とした、電話相談や来所相談を行う。

3 「訪問相談」 ※平成28年度支援ケース数：7学校園訪問，78名

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒とその学校園の依頼に応じて、学校経営アドバイザー（附属小学校スタッフ）と特別支援教育コーディネーター（附属特別支援学校スタッフ）の2名、を原則とし、必要に応じて大学のスタッフを加えて学校園を訪問する。

※ 2ケースについては、関係職員によるケース会議を行った。

4 「研修支援」

県内の教育関係者を対象とした、公開研究会の開催や、研修講師の派遣、検査器具の貸し出し等のそれぞれのニーズに応じた研修の機会を提供する。

※ 事例検討型ワークショップ2回（公開）を実施し、教育関係者等、のべ26名が参加した。

※ 特別支援学校公開研究会にて、ポスター発表を行った。

5 個別・グループ・集団指導（年間12回開催）

県内の小・中学校に在籍する特別な配慮を必要とする児童生徒とその保護者を対象に、指導、支援を行う。また、そこで見られた児童生徒の様子を基に、センター・在籍校・保護者の三者が在籍校や家庭でのよりよい支援について検討していく。

※ 保護者・在籍校担任等研修会（1回開催）で、埼玉大学教育学部 中下富子先生よりご講演をいただいた。

6 諸検査の実施 ※平成28年度支援ケース数：3名

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒の保護者からの要望に対して、諸検査等によるアセスメントと、エビデンスを基にした対応を検討していく。

7 先進校の視察

※ 香川大学附属特別支援教室「すばる」、香川大学教育学部附属特別支援学校（坂出校）の運営形態や指導方法について視察を行った。

8 「ケース会議の進め方マニュアル」 3月 作成（来年度、データ化したものをHPで公開）

9 平成28年度事業「報告書」 3月 作成（来年度、DVDで配付）

● 報 告

附属小学校における取組～提案授業・授業研究会～

学部・附属学校共同研究センター長 上 條 隆

附属小学校では、各教科等部の研究方向に沿った提案授業を実践・公開し、各教科等部の研究妥当性・有効性について、その授業事実を基に討議することにより、研究の具体化及び一人一人の教員の授業力向上に資することを目的に、11月上旬から2月下旬にかけて提案授業及び授業研究会を実施している。

各教科等部の研究の方向及び授業研究会の深化に寄与できるよう、附属小学校における提案授業・授業研究会に、以下のセンター運営委員、あるいは、各教科等部の研究協力者の学部教員が参加した。

〈提案授業 参加者一覧〉

役 職	職 員 名	日 時	備 考
教育学部 准教授	栗原 淳一 先生	平成28年11月 1日(火)	理 科 研 究
教育学部 教 授	懸川 武史 先生	平成28年11月 2日(水)	総合的な学習研究
教育学部 准教授	前田亜紀子 先生	平成28年11月 8日(火)	家 庭 科 研 究
教育学部 教 授	山崎 雄介 先生	平成28年11月21日(月)	道 徳 研 究
教育学部 准教授	鬼澤 陽子 先生	平成28年11月29日(火)	体 育 科 研 究
教育学部 教 授	上原 景子 先生	平成28年12月 8日(木)	外国語活動研究
教育学部 教 授	吉田 秀文 先生	平成29年 1月18日(水)	音 楽 科 研 究
教育学部 准教授	郡司 明子 先生	平成29年 1月23日(月)	図画工作科研究
教育学部 教 授	江森 英世 先生	平成29年 1月30日(月)	算 数 科 研 究
教育学部 准教授	濱田 秀行 先生	平成29年 2月 2日(木)	国 語 科 研 究

- 提案授業は、5校時または6校時（45分間を原則）とする。
- 授業研究会は、授業を実施した日の16:30から行う。
- 授業研究会は、120分とし、その内容は、次の時間を目安とする。

- ・研究の方向及び授業説明……………20分間
- ・質 疑……………20分間
- ・討 議……………65分間
- ・指導講評……………15分間



平成28年12月8日（木）
外国語活動研究授業の様子

● 報 告

現職教員の成長を促す温かな学び合いの場

教育実習・実践開発部門 吉 田 浩 之

平成28年度の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2016」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」が、次の日程・内容の通り行われました。延べ参加人数は102名でした。今年度も教員一人ひとりの問題意識に支えられた、温かいつながりのある学び合いができました。大学の先生方の理論知を積極的に自分の実践知に取り入れようと何度も何度も質問を繰り返しながら理解しようと努力する姿勢に、本当に頭の下がる思いで胸がいっぱいになりました。そのような真摯な姿勢で参加された先生方に、改めてお礼申し上げます。

2016 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

講 座 日	担当／所属／専門分野	内 容
第1回講座 5月14日	13:30～15:00 〈常葉大学〉 堀 井 啓 幸 教 授／教育経営	アクティブ・ラーニングを活かす教育環境
第2回講座 5月28日	13:30～15:00 〈群馬大学〉 岩 瀧 大 樹 准教授／臨床心理学	学校移行・環境移行を支援する —キャリアカウンセリングの観点から—
第3回講座 6月4日	13:30～15:00 〈山形大学〉 木 村 松 子 准教授／ジェンダー論	変動する学校と道徳・人権教育
第4回講座 6月18日	13:30～15:00 〈東京学芸大学〉 佐々木 幸 寿 教 授／教育行政学	実践ニーズに対応した学校法規の運用 —判例を使って学ぶ—
第5回講座 7月2日	13:30～15:00 〈群馬大学〉 吉 田 浩 之 准教授／生徒指導	いじめ防止対策推進法に則った教育現場の取組状況
第6回講座 7月16日	13:30～15:00 〈上越教育大学大学院〉 松 井 千鶴子 准教授／総合的な学習	アクティブ・ラーニングでつくる探究的な学習
第7回講座 10月1日	13:30～15:00 〈群馬大学〉 深 谷 達 史 講 師／教育心理学	学習者のつまずきを考慮した学習支援
第8回講座 10月22日	13:30～15:00 〈群馬大学〉 霜 田 浩 信 教 授／障害児心理学	発達障害の子どもへのアセスメントと支援 —応用行動分析の視点からのアプローチ—
第9回講座 11月12日	13:30～15:00 〈愛知教育大学〉 野 平 慎 二 教 授／教育哲学	教育思想史の視点から学校教育を語り直す
第10回講座 11月26日	13:30～15:00 〈群馬大学〉 黒 羽 正 見 教 授／教師教育	教師が変われば子どもも変わる —子どもの力を伸ばす教師の構え—

ここで、各講座に参加した先生方の感想を紹介させていただきます。

- ・道徳の評価という点で話し合いがあり、現場に迫ってきている問題を身近に感じることができました。子どもの普段の姿、成長を手助けできるような評価となることが望ましいと感じました。よりよいクラスへの問題意識を持った教師としての態度が試されているように感じました。
- ・職業柄、学校の先生方の授業を参観する機会が多くあるが、今回の講義で自分に欠落しているものが多くあることを感じた。学校現場は大変忙しく、1時間の授業の中で一斉授業というスタイルで一人一人のつまずきに対応するのが難しいのが現状です。本日の講義で丸暗記ではなく情報を関連づけたり、根拠を考えさせたりすることを日々の授業の中で意識して取り組んでいくことが大切だと感じた。
- ・学生の私たちにも分かりやすく丁寧に教えていただき、大変勉強になりました。教員採用の勉強に役立てたいと思いました。色々な事例は難しい問題が多く、法規が分かることでそこから分かることが多々あるので、今後も勉強を続けていきたいと思いました。
- ・物事の良いか悪いの判断は法律を学ぶと共に、世の中の「不適切」な基準を理解した判断、行動をしていくべきだと学びました。今後管理職の判断は大変であると感じました。
- ・自分自身のもつ暗黙知を振り返り、見直すことは、現場の教員にとって、自分自身の教師としての在り方をも見直すことになるという点で、厳しいが大切なことであると実感できた。そして、その難しさも感じた。子どもの前に立つ教師であるためには、避けては通れない課題である。

かつては、多くの学校で先輩教員が若手教員の授業実践を臨床的に指導するという「授業研究を継承する文化」が存在していました。しかし、苛烈な競争主義社会の中で教師の仕事は過酷さを増す一方、教職の専門性開発の中心である「教員仲間同士」で学び合う校内研修は衰退・形骸化を余儀なくされています。結果的に教師の豊かなパーソナリティが圧迫され、教職への自信や精神的ゆとりさえも奪い取られ、離職される教師たちの様相も窺えます。今の学校教育に対する自身の問題意識を大切にして共に学び合い、高め合ながら、今日の教師受難の時代を一緒に乗り越えていきませんか。平成29年度も先生方の主体的な参加をお待ちしています。



● 報 告

教育臨床心理部門の取組

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

○ 教育臨床事例検討会 ～2016年度の取り組み～

教育臨床心理部門が開催する「教育臨床事例検討会」は、6年目の取り組みを迎えることができました。今年度は主にスクールカウンセラーの観点から教育相談に関わる事例検討会を重ねてきました。また、内容としては、不登校をはじめとする学校不適応問題だけではなく、構成的グループエンカウンターなどの、予防・開発的な介入や、グループエクササイズによる、スクールカウンセラーの関わりについても、実践を通じて知見を深めることができました。各回の概要は下記のとおりです。

2016年度教育臨床事例検討会の活動

回	実施日	時 間	事例提供者	事 例	参加者
1	2016年 5月31日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	中●の3学期から不登校になった男子生徒の母親支援	8名
2	2016年 6月28日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	不登校の女子中学生と母親へのチーム支援について	5名
3	2016年 7月26日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	スクールカウンセラーによる構成的グループエンカウンターの可能性を考察する	7名
4	2016年 9月27日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	スクールカウンセラー複数配置校における教育相談実践事例	7名
5	2016年10月25日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	自閉症スペクトラム障害の子どもへの支援を考える	6名
6	2016年11月29日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	中学生のアクティビングアウトへの支援を考える	6名
7	2017年 1月31日（火）	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	スクールカウンセラーによる家庭支援の検討	5名
8	2017年 2月28日（火）	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	2016年度のスクールカウンセリングを振り返る	－
9	2017年 3月（火）	19:30～21:00	検討中	検討中	－

2017年1月時点での報告とする。

○ 体験的科目における地域貢献

2016年10月22日（土）～23日（日）の1泊2日で、赤城青少年交流の家のイベントである、「秋のアウトドアフェスタ」に2年生66名が参加し、企画・運営のサポートを実施しました。今年で3年目となる取り組みになりますが、例年以上に会場する子どもたちを「安全第一」で、アウトドア体験の楽しさを体験できるよう、学生たちは準備の段階から工夫や検討を重ねてきました。参加学生の感想を紹介します。

「秋のアウトドアフェスタに参加して」

教育学部 2年生女子学生

子どもたちと関わって分かったのは、改めて十人十色で、性格が一人ひとり異なるということです。シャイな子ども、アクティブな子ども、様々であり、教員を目指す者として、それらの子どもに、適切に関わらなければならない難しさと楽しさを感じました。また、「教える」ことについては、指導者が熟知することと同じくらい、子どもの自主性を尊重した押し付けない大切さを学びました。

赤城合宿の前に、事前合宿で取り組んだ人間関係づくり、自分のポジティブな面、頑張りたい面を把握していたため、それらを子どもたちとの触れ合う中で、活かすことができました。相手を理解しようと努力する姿勢の大切さを実感できました。



● 報 告

群馬大学教育実践研究 34 号発行のお知らせ

紀要編集委員長 田 辺 秀 明

群馬大学教育実践研究は、今年もCDに保存した電子データでの配布となりました。紙媒体のよいところは、机の上に置いておくだけで、冊子の内容が、表紙の執筆者・題目一覧等から見えてくることです。ただCDに保存し配布した場合には、その表紙すら人目に付かないということも生じてきます。そこで、このニュースレターのお借りして、34号の題目ならびに代表執筆者の一覧を掲示いたします。これと思った論文がありましたら、配布しましたCDまたは大学HPを開いて関心のある論文を読んでいただけたら幸いです。

題 目	代 表 著 者
古典についての学習意欲を高めることをねらいとしたプログラムのアクションリサーチ	濱田秀行・神野匡秀・阿部美咲・藤本宗利
中学校国語科における教科等横断型授業の構築 —学習単元「修学旅行の体験を紀行文にしよう」—	河内昭浩・藤本宗利・下田俊彦
RSA 暗号の授業実践 —Web アプリケーションを活用して—	山越康生
中学校における数概念に関する授業実践 —有理数と無理数について—	伊藤 隆・佐藤和之
温帯低気圧周辺の雲分布の特徴についての教授法	岩崎博之
予備実験に焦点化した学習会による観察・実験技能の養成 —主体的・協働的な活動を用いた教科専門性の深化—	小野智信
インクルーシブアート教育システム構築のための覚え書き 第2報	茂木一司
「まえばし未来アトリエ」における学びの成果と課題 —アーツ前橋・群馬大学連携による人材育成事業の意義—	春原史寛・茂木一司・手塚千尋・木村祐子・小田久美子 宮川紗織・茂木克浩・高木路子
進学志望者の少ないクラスにおいて教授方法が生徒の理解に与える影響 —性感染症・HIVに関連する分野での検討—	金子伊樹・新井淑弘
図書館で身につく学びのリテラシー —司書によるテキスト作成と教育実践—	堀口純夫・田中麻里
消費者教育における批判的思考力を育む家庭科授業開発	神部京香・小林陽子
知的障害児・者のコミュニケーションの拡大を目指した教育的係わり	小竹利夫・小関真奈美・中村保和
自己の学びを自覚し活用する力を育む小学校国語科の説明文読解指導 —読解方略と評価基準の工夫を通して—	柴田雅恵・佐藤浩一・武井英昭
小学校教員の資質能力に関する教員自身の自己評価や認識	矢島 正・高橋 望・新藤 慶
知識や技能を活用する力を育む中学校社会科学習指導 —「社会科カード」を取り入れたパフォーマンス課題を単元のまとめとして—	上田 剛・山口陽弘・石川克博
表現力を育てる小学校社会科学習指導の工夫 —協同学習と「なりきり活動」を取り入れた資料活用能力の育成を通して—	須田恵美・山口陽弘・石川克博
小学校国語科における自己教育力を活かした思考力・判断力・表現力の育成 —「見通し」と「振り返り」を内在化した児童を目指して—	柴崎厚志・山口陽弘・石川克博
オリエンテーリングを活用した中学生のピア・サポート活動の一実践	小野澤清楓・懸川武史・音山若穂
幼児一人一人の「自分なりの表現」を大切にする保育の探究	中村 崇・寛 寿実子・小泉美緒・西村竜哉
図画工作科におけるアクティブ・ラーニングの視点	中原靖友・豊岡大画
小学校体育授業の器械運動領域におけるスポーツ教育モデルの有効性の検討 —仲間関係に着目して—	吉井健人・大友 智・深田直宏・梅垣明美・南島永衣子 上田憲嗣・宮尾夏姫・友草 司・西田順一
道徳授業の力量形成に関する事例研究 —公立S小学校の校内研修に着目して—	黒羽正見
青年期版不器用さの自己認知尺度作成の試み —運動経験と過去・現在の自己認知の検討—	林 由紀子・岩瀧大樹・山崎洋史
前橋市小中学校の学校いじめ防止基本方針の策定状況と課題	吉田浩之

● 報 告

センター協議会・全国教育実習研究部門会議・資料室利用状況

教育実習・実践開発部門 吉 田 浩 之

■国立大学教育実践研究関連センター協議会への参加

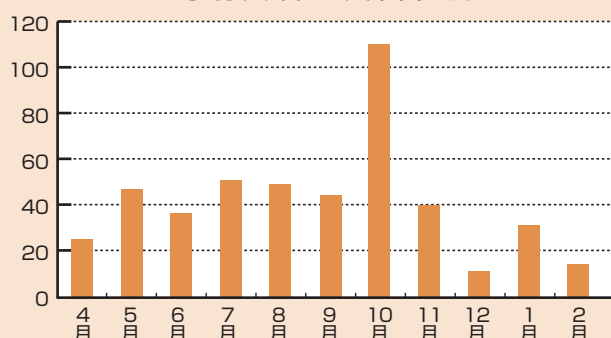
平成29年2月14日に、東京学芸大学で開催された第9回国立大学教育実践研究関連センター協議会に参加しました。午前中は、総会として議事・報告等があり、前回議事録確認後に、各部門担当幹事より2016年度各部門の報告と2017年度計画、収支報告と予算等の審議、各部門プロジェクト報告、規約改正、そして2017年度役員と続きました。その後、各関連センターが抱える課題提起と討論に進み、大阪教育大学の取組事例が報告されました。ここでは、教育学部への進学率の高い大阪府立高校長らを中心に、大阪の教育を担う魅力的な教師の育成を目指し結成された「府立高校教職コンソーシアム」（加盟校37校）と大阪教育大学が連携し、高校生が教師になることを具体的にイメージできる機会を設けた取組と課題についての報告があり、それを基に各関連センターを機能させていくための展望と課題について話し合いが進められました。最後に各部門会議が開かれ、参加した教育実践・教師教育部門では、中央教育審議会の「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（答申）」で示された「教員育成指標」について、先行的に取り組む静岡大学の報告がありました。答申では、多くのベテラン教員が定年退職し、新人が大量に採用される現状を踏まえ、教員の質や指導力を向上させるため、養成や採用、研修の一体的な改革を進めることを指摘し、各地の教育委員会と大学が連携して研修や養成を行う「教員育成協議会（仮称）」を新設し、「教員育成指標」を作成することを義務付けるよう求めています。静岡大学からは、複数の教育委員会の協議会による教員育成指標の作成にかかわった中で、地域によって教員に求めるニーズが異なる点があり、県内一律の指標作成は現実的ではないことなど、今後に向けた課題が示されました。

■日本教育大学協会 全国教育実習研究部門会議

平成28年10月14日（金）に富山大学で第30回全国教育実習研究部門会議が参加してきました。今回は26大学54名の参加者と附属学校園との連携の取組が1本、教員の力量形成が1本、学部教育実習の取組が3本の合計5の実践発表・実践報告がありました。参加者を小集団に分けての総合協議会では、「教育実習（学校インターンシップ）」の取り扱い、小学校教員志向を高める取組、の2点から論議が展開されました。特に教員養成課程での小学校特化につて、教科志向の強い入学生に対して、小学校での現場体験（実習やボランティア等）の増加や入試の枠組みの改変による対応等の指摘がありました。

■センター資料室の利用状況

月別資料室貸出状況



本センターの資料室は、学生や教職員の皆様に利用が可能です。とくに全国の教育実践センター紀要や群馬県内の小中学校で使用されている教科書、教師用指導書、学習指導書編、附属DVD-ROM、附属CD-ROM等があります。教育実習準備、卒業・修士論文や教育実践報告の参考文献をはじめ、さまざまな教育実践や研究活動にご活用下さい。

報 告

次年度へ向けた取組の紹介

教育実習・実践開発部門 吉 田 浩 之

■平成29年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2017」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」の事業内容が、下記の通り決まりました。リレー講座の詳細については、各学校へ案内ポスターを配布し、当センターのホームページでも掲載しています。多数の参加をお待ちしております。

2017 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

講 座 日	担当／所属／専門分野	内 容
第1回講座 5月13日	13:30～15:00〈常葉大学〉 堀 井 啓 幸 教 授／教育経営	アクティブ・ラーニングを活かす教育環境 ー教育空間と学習活動ー
第2回講座 5月27日	13:30～15:00〈群馬大学〉 岩 瀧 大 樹 准教授／臨床心理学	学校教育相談に活かす認知行動療法のエッセンス I ー問題の理解とケースフォーミュレーションー
第3回講座 6月3日	13:30～15:00〈金沢学院大学〉 小 林 淳 一 准教授／学校教育学	子どもに伝える学習の意味 ー知識活用法を学ぶー
第4回講座 6月17日	13:30～15:00〈東京学芸大学〉 佐々木 幸 寿 教 授／教育行政学	実践ニーズに対応した学校法規の運用 ー判例を使って学ぶー
第5回講座 7月1日	13:30～15:00〈群馬大学〉 吉 田 浩 之 准教授／生徒指導	いじめ対応に関する組織的取組の最新動向
第6回講座 7月15日	13:30～15:00〈上越教育大学大学院〉 松 井 千鶴子 教 授／総合的な学習	教育課程と授業をつなぐカリキュラム・マネジメント
第7回講座 10月14日	13:30～15:00〈群馬大学〉 深 谷 達 史 准教授／教育心理学	コンピテンシーを育む学習支援 ー心理学の視点からー
第8回講座 10月21日	13:30～15:00〈群馬大学〉 霜 田 浩 信 教 授／障害児心理学	気持ちや行動が荒れやすい発達障害児へのサポート
第9回講座 11月11日	13:30～15:00〈愛知教育大学〉 野 平 慎 二 教 授／教育哲学	これからの時代の子どもたちと創る道徳教育
第10回講座 11月25日	13:30～15:00〈群馬大学〉 黒 羽 正 見 教 授／教師教育	道 徳 教 育 と 教 師 ー道徳授業の難しさー

■附属学校教育臨床総合センターの取組

○ 長期研修院における教育研修員・研究員の募集

大学の研究知と学校現場の実践知の往還・統合を図りながら、現職教員の資質能力の向上と学校組織の成長をめざした協働的支援活動です。本年度の募集は、教育研修員・研究協力員ともに平成29年度4月3日(月)より随時受け付けます。群馬県内外の先生方による教育研修・教育研究に際して、学校教育臨床総合センターが多少なりともお役に立てれば幸いです。

○ 学校経営サロンのお誘い

このサロンは、現職学校教員と大学教員が学校経営について、日頃考えていること、感じていること等をざっくばらんに語る場です。日々の教育実践あるいは実践をしていく中で感じる疑問など、大学教員とともに語り合いませんか。若手、中堅教員の参加を歓迎します。この自由な語り合いを通して、参加者一人ひとりが少しでも成長できたらいいです。

○ 個別学習相談事業

この教室では、学校の先生を目指す本学部生が専門的なサポートの下、希望者に個別面接を通じて学習支援を行います。問題の解き方を教わるのではなく、解き方を自分で考えつく力やより良い勉強の仕方を身に付けることを目的としています。私たちと一しょに、自分に適した勉強の仕方を身に付け、楽しく学習することを目指しませんか。

教育研修員・研究協力員の応募方法及び学校経営サロン、個別学習相談事業の参加の詳細については、当センターのホームページをご覧ください。

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センターニュース第5号

発行日：平成29(2017)年3月

発行所：国立大学法人群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

〒371-8510 前橋市荒牧町四丁目2番地 TEL 027-220-7385 FAX 027-220-7381

URL <http://center.edu.gunma-u.ac.jp>